

ハイサイ！コスモな沖縄（うちなー）

量産工房

「……次は、FAXでいただきました。ペンネーム名桜生さんからのお便りです。紹介しましょう」

ローカル放送局の深夜番組担当の柳田アナは、いつものようにリスナーからの手紙を読み上げる。今手元にあるのは、FAXをワープロで打ち直したもののようだ。

「ハイサイ。柳さん。いつも楽しい放送、聞いてます。私は事情があつて、一人暮らしですが、先日の放送で紹介された『うず巻サンド』とか、『なかよしパン』とか、こちらでは知らないものなので、聞いていてよだれが出てきそうでした。ぜひ一度食べてみたいです。はあり。そうですか？ 名桜生さんは、名桜大学生だよね、名護の近くの。コンビニとかでも売っているんじゃないかと思うけど。名桜生さんは、本土の出身なのかなー？ ま

あ、たしかに、本土にはない沖縄オリジナルの菓子パンだからねー。あのバタークリームの中に入っている砂糖のじやりじやりっとした食感は、ぜひ、一度食べてみることをお勧めします。クセになる味とか、よく言われているようです。最近では、パンだけじゃなくて、地域限定のお菓子とかにも注目が集まっています、観光客や本土から移住してきたから言われてなるほどーと思うものがいっぱいあります。リスナーの皆さんも沖縄にしかないめずらしいものを見つけてみてはいかがでしょう。か。それでは『深夜カレッジ』今晚はここまで。また来週。お相手は北国からのさすらい人・柳田卓人でした。また、来週も聞いてちよ！」

エンディング曲が流れて、ディレクターの大嶺さんからOKサインが出る。  
「はい。お疲れ様でした」  
「ディレクター。めずらしいですね。わざわざFAXを打ち直して読みやすくしてくれた

んですか？　どうもありがとうございます」

柳田アナは、ディレクターの大嶺に声をかける。

「ん。ああ、最後のやつか？　あれねえ。少し変なんだよな。どうも回線が混線してたみたいでさ。再度送ってくれるように電話したら、国際電話に繋がっちゃってー。出た相手は、アメリカ人のナサって人でさ。英語でペラペラ言われてー通じないから仕方なくてー。金城君に頼んでワープロ打ってもらったんだ」

大嶺が肩をすくめながら答える。

「え？　ナサって……ひょっとして宇宙開発のNASA？」

「ははっ。まさか。アメリカ航空宇宙局のNASAあ？　そんなのありえん。ありえん」

「でも、おもしろいじゃないですか。これを機に、NASAの方とコンタクトがとれたりして……。宇宙開発のおもしろい裏話が聞けたりしたらー」

「ありえんね。第一、俺は英語できないから。柳田はできるのか？」

「ははっ。私が話せるのは『デスイズアペン』くらいですよ。無理です。誰か英語話せる人、連れてきてください」

柳田アナが、苦笑いしながら答えた時だった。突然電話が鳴り、番組スタッフの金城が出る。

「は？ は、はろー……。そ、ソーリー。あいきゃんなんとすぴーくイングリッシュ……。え？」

金城が受話器を持ったまま、ディレクターの大嶺と柳田アナの方を見る。どうすればいいのか、途方に暮れた顔だ。

「ディレクター……。アメリカから、ナサの方から、お電話です」

「は？ 何の用だ？ 用件は？ 俺に代ってもダメだぞ。俺は、英語はしゃべれん」

「あ、たぶん大丈夫です。日本語で話してくださいからー」

大嶺は、しぶしぶ受話器を受け取る。

「はい。ディレクターの大嶺ですがー」

受話器の向こうから、女の声が聞こえてくる。おもしろそうに思った柳田アナも、大嶺の持つ受話器に耳を近づける。

「私、ユリア・リユート입니다。アメリカ航空宇宙局NASAの深宇宙電波探査チームで主任研究員してる。この前の電話のこと、確認することある」

「先日の：：ああ、あの間違い電話ですか？  
どうもすみません。電話が混線してたみたい  
で：：」

「混線？ 間違い？ ちがう。そちらに送ったFAXの中身。知りたい。協力する」

「あ、いや、あれは送った本人以外に見せることはできません。個人情報も含まれてますので：：」

大嶺は、基本的な対応をとるが、NASAのユリアという相手は納得しない。

「あなた、間違ってる。FAX、個人、関係

ない。拒否すると政府にいう」

「はああ？ それ脅しのつもりですか？」

大嶺は次第に苛立ってくる。

「脅し？ そう受け取る、かまわない。F A

Xの内容、教える。すぐに！」

「だめです。できません。もし、どうしてもというなら、正式に文書で依頼してください」

柳田アナは、これはまずいと思い、合図を送ったが、大嶺は頑として聞き入れない。とうとう相手は電話を切ってしまった。

「ディレクター。いいじゃないですか。どうせ、番組でオープンにした内容じゃないですか？ 教えてもいいじゃないですか？」

「何を言う！ 個人情報だぞ。マスコミが個人の秘密を守れないでどうする！」

「でも、何ですかね。F A Xに何かすごいことでも書かれてたんですかね？」

「ないよ。せいぜい相手の電話番号と名前、住所くらいだ」

その時、スタッフの金城が話に入ってきた。

「ディレクター。あのFAXの中身、なんかおかしくないですか？」

「何が？」

「あ、名桜生さんってペンネームかと思ったんですけど。ひよつとして住所の間違いかも……」

「ははっ。何バカなことを。俺は名護の出身だが、『メイオウセイ』って住所なんかあるもんか」

ディレクターの大嶺があきれたように答える。

「いえ、カタカナで書かれていたので、ディレクターの言うとおり漢字にしたんですけど。ひよつとして、冥王星（準惑星）のことじゃないかと思って……」

「なるほどね。なら宇宙つながりで、NA SAとも関係があるわけ……？ ええっ？」

金城の言葉をきいてうなずいた柳田アナは、自分で自分の言葉に驚いてしまう。

しばらくの沈黙の後、ディレクターの大嶺

は、FAX用紙をとってきて、改めて見直す。  
FAX用紙には、かなりゆがんでいるものの、  
黒い宇宙空間らしきものを背景にっこり微笑んでいるコスプレ少女らしき姿の写真がプリントされていた。

「あ、バニーガール！」

柳田アナは、その掠れた写真から、少女の頭にウサギの耳らしきものがくっついていているのを指摘する。

「本物ですかね？」

スタッフの金城がつぶやく。

「冥王星にウサギはいない」

大嶺ディレクターが答える。

「あ、でも月だったら……いけません……よね」  
金城が反論するが、大嶺に睨まれて黙ってしまう。

「お、おもしろいじゃないですかあ？ もし、この子が冥王星人？ いや宇宙人だったら、うちの放送を聞いてくれてるわけですよ。電話がつながらないなら、今度ぜひ放送の中



で呼びかけてー。沖縄に招待しましょうよ。  
ディレクター。ぜひ、やりましょう！」

柳田アナが興奮して叫ぶ。

「あのかなーっ。そんなアホなことできるか  
っ！」

けれど、柳田アナの説得を受けて、大嶺は  
さりげなく呼びかけるといふ条件で、許可を  
してくれたのだった。

翌週の放送の中で、柳田アナは期待を込め  
て、ウエルカムの熱いメッセージを伝えたが、  
その後特に反応らしい出来事はなく、三人の  
期待は急速に落胆へと変わっていった。

それから数日後、アナウンス部で収録原稿  
のチェックをしていた柳田アナのところの後  
輩の箕川アナウンサーがやってきた。

「柳田先輩。このニュース知ってます？」

「ん？」

「UFOですよ。未確認飛行物体！ 名護市  
の沖合いで謎の光が目撃されて、写真にも撮

「られているんですよ」

「はー。また、米軍の照明弾じゃないの？ 前にもあっただろ。全国ニュースでも取り上げられたけど、また同じやつなんじゃないかな」

柳田アナは、箕川アナが渡してくれた新聞記事を見ながら、しばらく前にあったUFO騒動を思い出して指摘した。

「やっぱり、そうですかねえ。まだ米軍も何も公表してくれませんか。ひよっとしたらって期待したんですけどお」

箕川アナは、そう言うのがっかりした顔で出て行く。

「あー。箕川。今日の予定は？」

「僕ですかあ？ ラジオカーで、今日は名護まで行ってきます。国道沿いにオープンしたコンビニの取材です」

「コンビニ？ 取材って、何か面白いものでもあるのか？」

「ええ。役所の証明書がとれる自動交付機が設置されて、近くの住民にとっても好評みた

いんです。オープンしてまだ日が浅いですけど、  
いろんな人が来てるみたいで、店長さんの話  
では、昨夜なんかバニーガールまでやってき  
たって言ってましたから……」

「ば、バニーカーలుう？」

柳田アナの頭を稲妻のような衝撃が走った。

「み、箕川っ。まで。俺も行く！」

「ええっ？　ダメですよお。先輩は、午後の  
ニュースがあるじゃないですか。そんな勝手  
なことしたら、部長に怒られますよお」

箕川アナが柳田アナを押しとどめようとし  
たその時、突然、アナウンス部の部屋のドア  
が開いて、大嶺ディレクターと警察官、そし  
て私服刑事らしき面々がドカドカと入ってき  
た。

「『深夜カレッジ』担当アナウンサーの柳田卓  
人さんですね。署までご同行願います」

「え？　あ、俺、今から取材なんだけど……」

背広姿の私服刑事らしき男が警察手帳を明  
示して、首を横にふる。

「やっぱりダメ？ ……でつすよねー」

任意同行されていた那覇警察署で、柳田アナと大嶺は厳しい取調べを受けた。容疑は、アメリカ航空宇宙局NASAのコンピュータに対する不正アクセス容疑だ。問題のFAX用紙もすでに証拠品として没収されている。

「NASAからの訴えでは、このFAXは、コンピュータを遠隔操作して、そちらに送信された形跡があるんだ。どうやって、不正アクセスした？ 目的は？ そして何を盗もうとした？ 吐いてもらおうか」

警視庁の公安から派遣されてきたという男は、ストレートに聞きたい事を質問してきた。「そんなこと、してませんって。信じてくださいよ」

柳田アナは、しつこく繰り返される質問にうんざりしながら答える。

「『なりすまし』とかじゃないんですか？ 不正アクセスとかなら、トレースして僕の無実がわかると思いますけど？」

「やけに詳しいじゃないか？　それで証拠隠滅も図ったんじゃないか？」

「勘弁してくださいよ。私、アナウンサーですよ。一般的な情報や知識が詳しいのは当たり前ですって」

結局、柳田アナと大嶺が開放されたのは、その夜の午後七時過ぎのことだった。

局の近くにある居酒屋で、大嶺は、抑え切れない怒りを鎮めようと、泡盛の水割りをおかわりしていく。

「ディレクター。少しピッチが早すぎますよ」  
柳田アナが注意するが、飲み干すスピードは変わらない。バンバンとテーブルを叩いて、ウチナーグチで怒りをぶちまける。

「ぬーやるばーが。あぬひゃー。ぬーんわからんとーてい、どーかっていーびけーあびいてい！　たっくるすんどお！」

「落ち着いて。ラグビーじゃあるまいし、タツクルなんかして、どーすんですか？　男同

士で気持ち悪い……。ここは冷静にですねー」  
「柳田っ。やーは、なーひんウチナーグチ勉強さんねーならんどお！」

大嶺が、少し白けた顔をする。

「ええ。それはわかりますよ。十分その必要性は理解してます」

「えー。ぬーでいちわんが、あぬひゃーんかい、タツクルすんばあ？」

「ははっ。ちがいました？」

柳田アナが自分の聞き違いを確認する前に、警察から返されたスマホに着信が入る。

「あ、ちよつと失礼します」

柳田アナがスマホに出ると、大嶺ディレクターはブツブツ言いながら、再び泡盛の水割りをおる。

「先輩。たいへんですう」

スマホの相手は、箕川アナだった。

「そりゃこっちも同じだ。一日、留置所に缶詰めにされてたんだぞ」

「そんなのどーでもいいです。先輩、宇宙人

に知り合いがいるんですかあ？」

「は？」

「ウサギの耳した宇宙人ですっ！ 先輩、何かとんでもないこと約束したでしょ！ 宇宙人、名前、えーっと、メイ・オウ・セイさんだったかな。今から、会いに行くって飛び出していったんですよお！」

「う、宇宙人ん？ まさか、あの名護のバニーガール？」

「ええ。おもしろそうだと思って張り込みしてたら捕まっちゃってー。同じところで働いてるってわかったから、開放されましたけどおー。かわいいけど、かなり不満持ってたみたいですよ」

箕川アナの話からすると、どうやら名護に現れたバニーガールは例の宇宙人で、名前が、メイ・オウ・セイらしい。  
「でい、ディレクターっ。す、すぐ局に帰りましよう」

柳田アナは、大嶺の手を引っ張るが、半分

いい気分です酔っ払ったディレクターの反応は鈍い。

「はあーっ？ なまからなあ？」

「いや、生ビールは後にしてください。お客さんが来るみたいなんですよ。だからー」

「あちゃーにせー。あちゃーに」

「お茶ですか？ 酔い覚め？ 熱いお茶でいいんですか？」

柳田アナはあわてて店員を呼び、お茶を頼む。

「ウーロン茶しかありませんが……」

「それでいいよ」

「えー。まてえ。たーが飲むばあ？」

「は……。バー？ まだ飲むつもりですか？ ダメですって。お客さんって、例の宇宙人かもしれないんですよ！」

「あきさみよお。宇宙からん。うちなーんかい、観光でいち、ちゅーるばあ？ でーじなとおーさやあ」

大嶺ディレクターは、カラカラ笑って全然



取り合おうとしない。

柳田アナが困っていると、そこに店員がやってきた。

「お連れ様が来ました」

「は？」

柳田アナが驚く。店員の後ろには、黒の色っぽい服を着たバニーガール？ 型の宇宙人少女が立っていた。

「ヤナギダ。プロミスの通り、ご馳走になりました。飯食わせる」

バニーガールがにっこり笑って個室に入ってくる。

「え？まさか、君……」

「私、メイ・オウ・セー。あなたの『深夜カレッジ』のリスナー。歓迎すると言うから、来た。おなかすいた。飯食わせる」

柳田アナは、ポカンとしながらも居酒屋のメニューを取り出して、バニーガールに渡す。メイと名乗る宇宙人少女の衣装は、黒を基調としていて、どう見てもバニーガールの姿に

しか見えない。ただし、白くて長い髪の間から伸びているウサギのような耳は、どうも自前のものようだ。時々、物音に反応してピクピク動くから間違いないだろう。

「ああ。ウエルカム。好きな注文して……。放送でこっちに來たら歓迎するって約束したからね。えーっと……名前は……」

「メイって呼ぶ。まず、ラフテー、ソーミンチャンプルー食べる。それから……」

「はいはい。メイちゃんは、ラフテーとソーミン……。その前に、飲み物は何にする？ あ、その前に歳いくつ？ まさか、未成年じゃないよね？」

「ミセーネン？ ちがう。宇宙船の免許持っている。問題ない」

メイと名乗る宇宙人は少し首をかしげながら答える。

「そっかー。じゃ、ビールからいく？」

柳田アナがそう言った時だった、トローンとしていた大嶺がカッと目を瞠る。

「えー！ わらばーんかい、さきい飲ますんばあ？ ならんしが」

柳田アナが意味を理解しかねていると、メイがすかさず答えた。

「あらん。わんねーわらばーあらん。ビールやさきいあらん。『名護の水』どうやぐとう」

「あれ？ 君、ウチナーグチ話せるの？」

柳田アナが驚くが、メイは当たり前という顔をする。

「？ ウチナーグチ。この星の標準言語のひとつ。だから勉強してきた。ゆたさるぐとうにげーさびら？」

「おおおっ。したいひやー……」

大嶺は、手を叩いて喜ぶが、もはや完全に酔っ払っていて、そのままテーブルに突っ伏して眠ってしまった。

久茂地周辺をパトロールしていた砂川巡査は、歩道に乗り上げて置かれている異様な物体を発見して、困ってしまった。すぐそばの

居酒屋に入り、店の従業員に声をかける。

「店の前のあれ、何？」

店の従業員が砂川巡査の指差したところを見て首を横にふる。

「さあ？　うちのじゃありません……。誰が置いたんですかね？　何です、あれ？」

「わからないから聞いてるんだけど……。まあ。車だったら駐車違反でレッカー移動するんだけど……。弱ったな」

砂川巡査は、改めてその物体を見上げる。それは有名なアダムスキー型円盤といわれているものにそっくりの形状をしていた。

「それでは、冥王星から来た宇宙人のメイちゃんを歓迎して、かりーさびらあー！」

おおおおおおおっ……。と店内に唱和の音が響き渡る。

箕川アナが、柳田先輩に呼ばれて居酒屋へ行くと、そこはもう大宴会の様相となっていた。

「メイちゃん。ゴーヤーチャンプルもどう  
ねえ。俺がサービスするよお」

カウンターで飲んでいた、見知らぬおじさ  
んが声をかける。

「いっぺーにふえーでーびる。苦いけど、  
身体にいいと聞いた。でも少し苦い」

「そーよお。ゴーヤーは、身体にとってもい  
いさあ。たくさん食べなさいよお」

「もつと早く来る。良かった……？ 残念」

メイちゃんは、ゴーヤーチャンプルを飲  
み込むと、ジョッキ片手に乾杯して回る。

「メイちゃん。色っぽいねー」

かりゆしウェア姿の公務員が、声をかける。

「イロっぽい？」

たしかバニーガール姿だけでも目立つのに、  
胸もわりとボリュウムがあって、男たちから  
すると目のやり場に困るとも言える。

「でも、沖繩に来たら、かりゆしウェアだよ」

「わかたん。服変える」

そう言うと、メイちゃんは、左手首の白い

カフスについたボタンをチョイと押す。とたんに、メイちゃんの身体が白い光に包まれ、気がついた時には、かりゆしウェア姿のメイちゃんがそこにいた。

「おおおっ。わんだふるく」「ブラボー！」

隣の座敷の人たちからも拍手と歓声が沸き起こる。まるで手品の扱いだ。

「な、何なのこれ？　宇宙人の歓迎会？」

箕川アナが呆然としてみると、柳田アナがそばから手を引っ張る。

「あ、先輩く」「遅いじゃないか」

「えー。これでも、名護からラジオカー高速から飛ばしてきたんですよお」

「なんで、あっちがそっちより早く来るんだよ。しかも、なんで俺たちがこの居酒屋にいるって、わかったんだよ？」

「知りません。UFOで飛んできたんじゃないのですか？　店の前に、らしいのもあるしー」

「えっ！　じゃ、あの子、本当に宇宙人？」

柳田アナと箕川アナは互いに顔を合わせて、

改めてメイと名乗る少女を見つめる。居酒屋の中で、居合わせた人たちと和気あいあいと乾杯してまわる様子を見ると、どうみても宇宙人には思えない。ただひとつ、大きなウサギ型の耳がついている以外は……。

「いいんですかねえ？」

箕川アナが、つぶやく。

「いーんじやないの。沖縄の言葉にあるじゃない。ほらー」

「『いちやりば ちよーでー』ですかあ？」

「そう。それ！ 沖縄ってやっぱいいなって思うよ。宇宙人とのファーストコンタクトって言ったたら、戦争とか事件とか、なんだかきな臭くなり勝ちじゃない。なのに、このフレンドリーな雰囲気……いいと思うよ」

柳田アナは、素直な感想を口にする。

「ですよねー。僕も何か飲もうかな」

「無理するなよ」

「いえ。自分もこの輪の中に入りたくてー」

那覇市久茂地のとある居酒屋で起こった突

然の宇宙人歓迎の大宴会は、こうして夜遅くまで続いた。偶然店に入った観光客たちも巻き込みながらー。

「昨晚、この放送局の近くから正体不明の飛行物体が飛び立ったのをカテナ基地のレーダーが捉えているんだ。素直に白状しろっ」

放送局に乗り込んできた公安の担当官が、血相かえて、柳田アナの座っている机を叩く。

「あー。昨日、飲み過ぎたんでー。二日酔いなんです。少し静かに話してください。たぶん、それ、宇宙船ですよ。メイちゃんのー」  
柳田アナは、ズキズキする頭を押さえながら、気だるそうに答える。

「宇宙船だあ？ ふざけてるのか？」  
公安の担当が、真っ赤になって怒鳴る。

「まあ、落ち着いて。ねえ。ビールを十杯近く飲んで、宇宙船飛ばしたら、飲酒運転になりますかね？」

「はあああっ？ 何だそりゃあ？」



「いえね。昨晚、近くの居酒屋で、宇宙人の女の子と飲んだんですけどー。ぜんぜん酔わないんですよ。だから、いいのかなーって思っ

「飲んだ本人が運転したら、危ないだろが！」

「いえ、自動航法システムで飛ぶとか言っ

「なら、関係ないんじゃないか」

「そうですねー。それに相手は宇宙人ですし……。道交法も適用できないですしね？」

「なっ、なあにいいいいっ！」

公安の担当が、驚いて目を剥く。と、そこへ箕川アナが白いビニール袋を持って入ってくる。

「先輩。買ってきました」

「ああ。ありがとう」

柳田アナは、ビニール袋を受け取ると、中身を確認して、目の前の公安の担当者たちに声をかける。

「行きますか？　メイちゃんに、あ、宇宙人に

会いに？」

「……」

公安の担当者たちは、黙って顔を見合わせるだけだ。それでも、柳田アナが袋を持って立ち上がると、のこのことその後についていく。

柳田アナが向かったのは、放送局の屋上だ。

柳田アナは、屋上の手すりに背を持たせかけて空を見上げる。

「そろそろかな？」

柳田アナが腕時計を見て、そう言った時だ。キンキンという音とともに、突然その背後から銀色をしたアダムスキー型円盤がひよっこりと姿を現した。

「な……」

公安の担当たちは、それを見て声を失う。その間に、円盤の一部がパカッと開いて、ウサギ耳の女の子が現れる。

「あー、おはよう。メイちゃん。これ、約束のお土産だよ」

柳田アナが、ビニール袋を手すり越しにメイちゃんに手渡す。

「あーっ。いっぺーにふえーでーびる。ありがとう」

ウサギ耳の宇宙人、メイちゃんが微笑んでビニール袋を受け取る。中に入っているのは、「うず巻サンド」と「なかよしパン」だ。他にもいくつかのパンが入っている。

「じゃ、またね。気をつけて帰るんだよ」

「はい。私、忘れない。一生。皆さんへ感謝」  
ウサギ耳のメイちゃんはそう言う。と円盤の中に入ってしまった。

円盤がフワフワと少しずつ浮かび上がる。その時になって、公安の担当たちがハッと我にかえって手すりに突進する。

「あ、お、おい。止めろ。あいつを止めろっ！」

「えー。無理ですよお」

「無理でもなんでも、とにかく止めろっ」

「どうやって？ できませんってば」

局の屋上で騒ぎが起きる中、空に浮かぶ円

盤を見て、周囲のビルの窓際や通りにたくさんの市民が集まってくる。

そこに、爆音とともにカテナ基地を飛び立ったアメリカ軍のAV8Bハリアー二機が、国道五十八号線の上を低空飛行して突っ込んでくる。けれど、メイちゃんの円盤は、それが接近してくるまで待っていない。ぴゅーんと一気に飛び上がっていく。

それを見たハリアーがジェットエンジンを噴かせて上昇するが、まったく追いつけない。

メイちゃんの円盤はあっという間に空のあなたに吸い込まれ、やがて見えなくなってしまう。

「行ったか？」

「あ、ディレクター」

いつの間にか柳田アナのそばに、大嶺が立っていた。そのそばを公安の担当たちが大慌てで報告のためか、駆け出していく。

「ずいぶん人騒がせな宇宙人だったな。かわいかったけどよ」

「そうですね」

かくして、那覇の久茂地を中心に起こった、宇宙人騒動は幕を閉じた。

一応……。

数日後。

「柳田さん……だね？」

メイちゃんと飲んだ居酒屋で、柳田アナは一人の男に声をかけられた。男は、夏なのに黒いフードを頭から被っていて少し不気味だ。

「これを受け取って欲しい……」

男が氷の塊のようなものがついたペンダント状のものを差し出す。中には、何か小さな物体が閉じ込められている。

「なんですか？　これ？」

「メイの形見だ」

「は？」

「メイ・オウ・セーは、私の娘だ。娘は、この星系のラピス星、君たちが『冥王星』と呼ぶ星に長いこと病気療養のため滞在していた。

娘がこの星へ遊びに来た時、とても良くしてくれたと聞いている。その礼というものだ。

我々は、星間国家同士の協定によって、この星の人類とコンタクトすることは固く禁止されている。けれど、自分の死期を悟った娘は、協定を破って、勝手にこの星へ上陸してしまった。問題のある行動ではあるが、娘の最後の我がままを許してほしい」

黒いフードを被った男は、そう言うと、黙って店を出て行った。

「……」

呆然とする柳田の手の中で、氷の塊のようなペンダントが光る。柳田は、そのペンダントの中に閉じ込められた物体に目を凝らす。

限りなく小さな物体は、よく見ると、「うず巻サンド」と「なかよしパン」の精巧なミニチュア？ だった……。

(完)